

国際理解教育論公開授業報告

社会科教育・寿 卓三

公開した講義「『国際理解』において問われているコト」の概略は以下の通りである。この講義は、初回の11月14日の講義であった。この講義を始めるにあたって、11月07日は、大学祭で休講なので、あらかじめ11月12日までにメールで解答するように2つの課題を与えていた。この課題に対してあらかじめ回答を提出した学生は15名であり、提出した学生の回答をプリントアウトして公開した講義で受講生に配布した。そして、この学生のコメントを受講生に読んでもらい学生からの感想や意見を聞いたあと、学生の回答の総括を行った。その後、提出した課題に対する寿の見解を説明して第1回目の講義は終了した。この講義へのコメントは、メールで提出してもらったのだが、極めて充実したコメントが多かった。その中から他の学生の意見から学び取ると同時に、教師の意図を受け入れつつも、全面的にそれに洗脳されるのではなく、自分なりに問題を考えていこうとする姿勢が顕著になっている1つのコメントを長文だが、先生方のご参考のためにあえて全文紹介したい。

自分は課題1で登場した人物たちのことを排他的だと考えていましたが、他の受講生の見解を読んでも、しっかり深くまで内容を考えた上で、排他的ではない。と書いていたので、とても勉強になりました。彼の考えは「愛国心の表れであり排他的ということにはならない。」という意見や、「芸術は排他的でも考え方は排他的ではない。」という意見はなるほどと思いました。国際理解教育を学ぶにあたって、どこを区切りとして自分の考えを述べたり・押し通したり・妥協したり、また、相手を尊重したりするかはとても難しいと思います。互いが共存していく中でそれらの課題をいかに柔軟に対応できるかが大切であり、そのような人間を育てる教育こそが国際理解教育だと感じました。

日本の文化の構造の説明はとても興味深かったです。確かに日本は2階建ての家で1階と2階

に階段は無いように感じます。その家に階段を造り、雑種文化を作り出せる市民が必要だと思いました。階段で行き来できるようになれば共存社会となり、国際化となるのだと思いました。しかし、私が心配するのは、全ての人が階段を行き来できるようになった時、独自の何かを失うような気がしてなりません。現実として、都会の町並みに差異はほとんどなく、個性がありません。しかし、それは誰もが共存できる暮らしやすい空間（雑種文化）ではあります。それが、国と国、人と人となった時、アイデンティティーの問題として現れるのではないのでしょうか。アイデンティティーは不変的なものではなく変りうるものであるからこそ心配です。しかし、授業で個人それぞれが持つアイデンティティーの比重は個人で違うということを学んだので、アイデンティティーが全く一緒になることは決してないのだと思えました。雑種文化を作る大切さを感じた反面、日本文化、大和魂のようなものは失いたくないと感じました。

授業はすべて、公開していたが、実際に参加していただいたのは、11月14日行われた、「『国際理解』において問われているコト」の講義のみであった。参加者は、竹永雄二先生、福田喜彦先生であり、この講義の後、社会科図書室で、両先生の参加のもと、カンファレンスが1時間行われた。

その際、議論となったのは、学習者の参加意欲をどう啓発するのか、学習者の問題関心と授業者の意図とをどう調和させるのか、学習内容に対する学生の理解の質の深化をどう測るかなどということであった。また、講義の準備、授業者の日頃の問題関心といったことも話題になった。

授業者にとって、今後の課題と思われるのは、学生参加の双方向性の講義を目指すとき、学生からの意見をどう整理し、それをいかに共有化するか、そして、質的な深化をどう図っていくのかということである。今後このような視点からの共同討議や共同研究も必要ではなからうか。